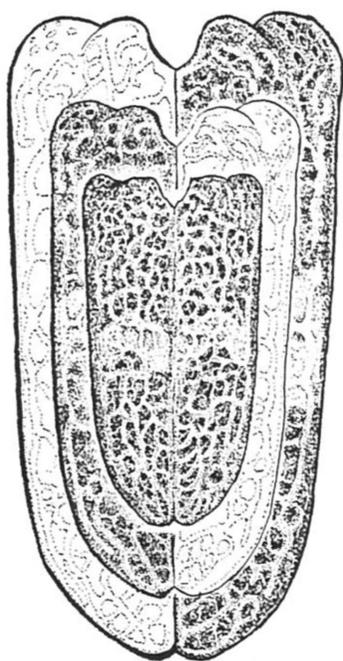


ENTOMOLOGICAL NEWS



Vol. 2, No. 1

(May 1974)

日本鞘翅目学会

ELYTRA Vol. 2, No. 1 目次

原 著

草間慶一 (KUSAMA, K.): <i>Necydalis</i> 属の研究史 (II) (Historical Review of <i>Necydalis</i> (Cerambycidae) (II))	1
郷 遠 (GOH, T.): ハチジョウウスアヤカミキリの幼生期の形態について (Morphological notes on the immature stages of <i>Bumetopia heiana</i> HAYASHI)	7
杉野広一: ヤエヤマクビナガハンミョウ与那国島の記録	11
藤田 宏: 伊豆神津島のクワガタ2種	11
藤田 宏: ジュウシチホシハナムグリの奥多摩における記録	11
小笠原隆: 徳島県剣山でアオナガタマムシを採集	12
秋山黄洋: 紀伊半島で採集された注目すべきタマムシ2種	12
藤田 宏: 神奈川県城ヶ島のルイスナカボソタマムシの記録	12
木附嘉理: 青森県におけるオオルリハムシの冬期採集例	12
平山洋人: 長野県軽井沢におけるオオシラホシハナノミの記録	13
高桑正敏: 山梨県のオオキボシハナノミの記録	13
小田義広・久保田篤男: 伊豆半島でハチジョウウスアヤカミキリを採集	13
大沢昭夫: 長野県戸台でヨコグロケンカミキリ	13
林 良一: 長野県温泉でムネモンヤツボシカミキリ	14
杉野広一: ムネモンウスアオカミキリ石垣島の記録	14
藤田 宏: 伊豆御蔵島のカミキリ2種	14
川田一之: 屋久島でオニホソコバナカミキリ♀を採集	14
斉藤秀生・川田一之: 関東周辺におけるトワダムモンメダカカミキリの採集記録2例	15
陶山 淳: 奥多摩川乗谷でフタスジカタビロハナカミキリを採集	15
藤田 宏: 東京都下奥多摩でホソツヤヒゲナガコバナカミキリを採集	15
深町宗道: 高知県室戸岬におけるキイロメダカカミキリの記録	15
編 集 後 記	16

表 紙……………木村 欣二

投稿規定

1. 日本鞘翅目学会々員は会誌 ELYTRA に投稿できる。
2. 投稿内容は甲虫に関連したものに限る。
3. 投稿の掲載可否および掲載時期については編集局の合議による。
4. 原稿分量は、原則として1号1篇あたり刷上がり16頁までとし、それ以上のものは2回以上に分ける。
5. 和文の原稿は横書き、原則として現代かなづかいを用いる。
6. 原著に関しては欧文表題を付すこと。
7. 欧文の原稿には和文表題を付すこと。
8. 原著には Summary (要約) を付すことが望ましい。
9. 和文の原稿では、種名は和名を主とし、学名は必要最小限にとどめる。
10. 新種および日本未記録種の記載については、必ず標本写真(原記載の場合は holotype に限る)あるいは写真に代わりうる図を付し、それらから種の特徴が判別不可能な場合には、別に図版でもってこれを補うことが望ましい。
11. 動植物の学名は、*Necydalis major* LINNÉ のように命名者は全記すること。ただし、同文中で重複する場合は省略してかまわない。
12. 文献は本文の終わりに一括して記すことが望ましい。雑誌名および巻号は省略体でよい。
(例) Ent. Rev. Japan 19, p.5~34, 1967
13. 活字の指定および校正は編集局に一任されたい。ただし、原著に関しては、初校は著者校正とする。
14. 別刷は原著に限って作成(50部以上)し、100部までは実費の半額を当会が負担し、それ以上は著者が全額負担する。
15. 掲載済の原稿は返却しない。ただし、原図・写真は希望があれば返却する。
16. 原稿の送付先は、当分の間、下記宛とする。

〒110 東京都台東区東上野4-26-8 福田惣一方, 日本鞘翅目学会

〔投稿に関する注意事項〕

- a. 和文は「～である」調を用いる。ただし、会話文はこれに当てはまらない。
- b. 欧文原稿は1行60字内外にタイプする。
- c. 未記録種の投稿に際しては、それが未記録であると考えた理由を明記することが望ましい。
- d. 分類の紛らわしい種の記録を行なう場合は標本写真を付すことが望ましい。なお、本会誌に用いるための標本写真撮影は当会にでも行なうので、希望者は事務局宛に連絡されたい。
- e. 写真および図版は出来上り予定寸法の1.5倍程度に製作するとよい。
- f. 採集データ(和文)は次のように略記すればよい。
5 ♀♂ 1 ♀, 群馬県武尊山, 16.VI.1970, 衣笠恵士採集
- g. 原稿は編集局により一部変更されることがあるが、変更箇所が内容及ぶ場合はあらかじめ著者の了解を求める。また、不備な原稿は書き直しを要求することもある。

Necydalis 属の研究史(Ⅱ)

草間 慶 一†

(静岡大学理学部)

5. *Necydalis* と *Molorchus* についての論争
前項までに述べたように、翅鞘の狭くなった種の方は *Stenopterus* に入れることが一般に受け入れられたが、翅鞘の短縮された種の方では主にイギリスとフランスの昆虫学者の間で論争が続いた。

1853 および 55 年に WHITE が大英博物館のカミキリのカatalogをまとめた時、彼は NEWMAN の意見を全面的に採用した。WHITE のカatalog中から属とそのシノニム、およびその属に含まれている種を第4表に示した¹⁶⁾。

1859年、スエーデンの C. G. THOMSON¹⁷⁾ [J. THOMSON とは別の人であるが、しばしば混同されている]* は、NEWMAN や WHITE に近い考え方であるが、LINNÉ の1758年の *Necydalis* に入っていた *major* と *minor* のうち、*major* を *Necydalis* に含ませ、*minor* の方は新属 *Caenoptera* を作り**これに移し、この属のタイプ種に指定した。*Molorchus* には FABRICIUS が1792年にこの属を作った時に入っていた *umbellatarum* をあててこの属名も残した。すなわち次のようである。

Necydalis major

Molorchus umbellatarum

Caenoptera minor

1866年¹⁷⁾には彼は *Caenoptera* を *Molorchus* の亜属とし**

Molorchus (s. str.) *umbellatarum*

Molorchus (*Caenoptera*) *minor*

としている。

フランスにおいては、WHITE のように *Molorchus* を廃したり、C. G. THOMSON のように新属を設立して *minor* をそれに移すような分類法には反対で、J. THO-

第4表 WHITE (1855) の分類¹⁶⁾

番号, 属名	110 <i>Heliomanes</i> NEWMAN
シノニム	<i>Necydalis</i> (一部) LINN. ^{a)} <i>Gymnopteron</i> (一部) SCHRANK
種名	1. <i>Sidus</i> NEWMAN, オーストラリア 2. <i>umbellatarum</i> LINN., ヨーロッパ 3. <i>insularis</i> 新種, 支那(香港) 4. <i>bimaculatus</i> SAY, 北アメリカ
産地	5. <i>Corni</i> LÉCONTE, 合衆国(アラバマ, カロライナ) 6. <i>minor</i> LINN., ヨーロッパ 7. <i>Indicus</i> HOPE, 北インド 8. <i>nigriceps</i> 新種, 東インド(Moulmein)
番号, 属名	112 ^{b)} <i>Necydalis</i> LINN.
シノニム	<i>Molorchus</i> (一部) FABR. ^{c)} <i>Gymnopteron</i> (一部) SCHRANK
種名	1. <i>major</i> LINN., ヨーロッパ 2. <i>ulmi</i> CHEVR., ヨーロッパ ^{d)} 3. <i>melanopterus</i> DEJ., ブラジル ^{e)}
産地	4. <i>auricomus</i> NEWMAN, オーストラリア 5. ? <i>depressus</i> MOTCHULSKY, ^{f)} コーカサス, ウラル山脈 6. <i>mellitus</i> SAY, 北アメリカ(合衆国)

a) 117番, *Stenopterus* ILLIGER のシノニムの所にも, *Necydalis* (一部) LINN. とある。

b) 111番, *Glaphyra* NEWMAN は現在は *Molorchus* のシノニム。この属の唯一の種の *semiusta* NEWMAN は, *M. bimaculatus* の亜種になっている。

c) 115番, *Hesthesis* NEWMAN のシノニムの所にも, *Molorchus* (一部) FAB. とある。

d) 2種をはっきり区別しているのではなく, *major* の方にも現在 *ulmi* のシノニムとされている種が3つ入っている。

e) 現在の何に当るか未調査であるが, *Necydalis* ではない。
f) *Molorchus umbellatarum* のシノニム。

† KUSAMA, Keiichi: Historical Review of *Necydalis* (Cerambycidae) (Ⅱ)

* []中は筆者の註。

**原著を見ていないので, *Caenoptera* が新属で書かれたか, 新亜属か不明。引用した文献を見ると両者がある。一応前号第2表の「亜属として記載」は取り消しておきたい。

MSONは1860年の彼の著書中では次のように取り扱っている¹⁹⁾。

245. *G. Necydalis* L.
(WHITE カタログ, p. 181. 6種)
246. *G. Molorchus* FAB.
シノニム *Heliomanes* NEWMAN
Gymnopterion SCHRANK
タイプ種: *M. minor* L. (*Necydalis*)
MULSANT氏を手本として私 [= J. THOMSON] もこの種が、この属のタイプ種と考える。

と述べ、*Molorchus* のタイプ種に *minor* を指定し、さらに1864年¹⁹⁾には *Necydalis* のタイプ種として *N. major* を指定した。

MULSANT も1862年の彼の“フランスのカミキリ”の第2版で²⁰⁾、*Molorchus* (s. str.) に *minor* を入れ、新亜属 *Linomius* を作り、これに *umbellatarum* 1種のみを含ませた。この J. THOMSON-MULSANT 方式が今まで日本で用いられてきた分類法である。

FAIRMAIRE も同じような考え方で、1864年の彼の“ヨーロッパの甲虫”中において²¹⁾、*Molorchus* に *minor* を指定している。その他もほぼ MULSANT に同じであるが、異なる点としては *Conchopteris* なる新属を作り、これに *umbellatarum* 1種を入れたことである。

一方イギリスにおいては、1834年の CURTIS²²⁾ および WESTWOOD (1840年)²³⁾ は、両者とも *Necydalis* のタイプ種は *minor* であると指定しており、この考え方を受けついで PASCOE は1867年²⁴⁾ に、フランス流の分類法に反対し、次のように主張している。

「*Molorchus* は FABRICIUS により *N. major* L. に対して創立された属である。*Necydalis* の名前は最初 LINNAEUS により彼の“*Iter Oelandicus*” *中で、*N. minor* に対して用いられた。しかし“*Systema Naturae*” の第12版中で [第10版の間違いと思う。*Zoological Record* 4: 291 (1867) にもその指摘あり]** 初めてその特長がはっきり述べられている。そしてその時は、*N. major* が先に置かれている。それゆえ、もし、属の第1番目の種をタイプ種として取るならば、1つの種に2つの属名が与えられることになる [*Molorchus*

major と *Necydalis major*]。しかしこの属の第1番目の種をその属のタイプ種とする、という法則をリンネの種に常に適用するのは間違いであり、また通常このことは行われていない。例えば、いわゆる彼の *Leptura* のタイプは今では *Donacia* であり、*Cerambyx* は *Acrocisus* である [*Leptura* および *Cerambyx* の属の1番最初に書かれている *aquatica* と *longimanus* のことで、前者はハムシ科のネクタイハムシの1種、後者は南米のテナガカミキリである]。その他 *Scarabacus*, *Cantharis*, *Tenebrio*, *Carabus*, *Elater* などでも第1番目の種は別の新しい属名が付けられている。さて *Necydalis* についてリンネの記述した特長は非常にあいまいなもので、“*Antenna setacea. Elytra alis minora, brevioribus angustior. Cauda simplex*”。最初の記述はおそらくハサミムシとの区別のつもりであったと思われる。

一方、FABRICIUS の *Molorchus* の記載は明らかに第1番目の種である *M. major* のみから取られており、これは Ent. Syst.⁹⁾ 中の彼の法則 [属の第1番目の種をタイプ種とする] に従っている。もし FABRICIUS が *N. minor* をタイプ種として取ったのなら、彼は“*Antennae thorace longioribus*” [触角は前胸よりも長い] とは書かなかっただろう。なぜならば、*minor* では触角は体長の2倍もあるから。リンネの属の定義はどの種にも当てはまるが、事実彼の種の大部分は異質のものである。FABRICIUS の記載はぴったりと *major* には適用されるが、*minor* には適用されない。それゆえ私 [PASCOE] は、*Molorchus* のタイプ種に *major* を当てるべきで、*Necydalis* には最初にこの名前を与えられた *minor* に対して用いるべきであると思う。

以上のように理路整然と、*Necydalis* と *Molorchus* のタイプ種はフランスで言っているのとはちょうど逆であると述べている。

この主張に対して、フランスの LACORDAIRE²⁵⁾ は1869年、彼の大著“*Genera des coleoptères*” の477頁の脚註において、

「*Necydalis* と *Molorchus* の名前は説明を必要とする。一番最初の *Necydalis* の記載は、1735年に出版された“*Systema Naturae*” の第1版中で、この本は非常に稀なものであるが、この中では何ら種の指示はない。その後リンネはカミキリモドキ科とジョウカイ科の後に置き、*N. minor* と *umbellatarum*、次いで *major* を追加した [*umbellatarum* については、現在は SCHREIBER となっている]。

* LINNÉ がいつ書いた著書か未調査。しかし“*Fauna Suecica*” の第1版⁶⁾ (1746年) でも、*Necydalis* には *minor* しか含まれていないとのこと。

** [] 中は筆者の註。

1792年, FABRICIUSはこの3種をもって *Molorchus* 属を作り〔本当は4種, 前号参照〕, *Necydalis* なる名前はカミキリモドキなどに用いた。

長い間このように考えられていたが, MULSANT (1839年)がこれら2属を区別した最初であり, *Necydalis* に *major* を, *Molorchus* には他の2種を当てた。後者〔*minor*〕が原記載の中で *Necydalis* について述べた性質に適合する唯一の種であり, もしその事がより価値のある事ならば, PASCOE の意見のように逆になると私〔LACORDAIRE〕は思う。さもなくば *Molorchus* を廃棄して NEWMAN によって *minor* と *umbellatarum* をもって設立された *Heliomanes* を採用しなければならない。しかしながら少なくともフランスにおいては, 最近の著書の中では MULSANT の意見を用いた。命名法をこれ以上混乱させないために一致させる義務があると私は思う。』

と述べて, *Necydalis* L. に *abbreviatus* PANZER, *major* L., *mellitus* SAY の3種を入れ, *Molorchus* FAB. に *minor* L. を, *Conchopterus* FAIREMAIRE に *umbellatarum* を入れている。

このフランス流の *Necydalis* のタイプ種を *major* とする考え方が, その後ドイツでも GANGLBAUER (1882年)²⁶⁾, REITTER (1912年)²⁷⁾, オランダ人の AURIVILLIUS (1912)²⁸⁾, ロシヤの PLAVILSTSHIKOV (1936)²⁹⁾ などでも採用され, 現在に至っている。

6. *Necydalis* と *Molorchus*

の今までの分類法

以上歴史的に述べてきた分類法をまとめてみると,

〔I〕 *N. minor* を *Necydalis* 属とする。

{ *Necydalis minor*
Molorchus major

CURTIS (1834)

WESTWOOD (1840)

PASCOE (1867)

〔II〕 *N. major* を *Necydalis* 属とする。

(i) *Molorchus* を認め, *minor* をこの属の代表的な種とする (以下の亜属などを認めない人 *印, も少なくない)

{ *Necydalis major*
Molorchus minor
Molorchus, *M. (Linomius)* または *Conchopterus umbellatarum*

MULSANT (1839, 1862)

THOMSON, J.* (1860, 1864)

FAIREMAIRE (1864)

LACORDAIRE (1869)

AURIVILLIUS* (1912)

MITONO (1940)³⁰⁾

GRESSITT (1951)³¹⁾

LINSLEY* (1963)

(ii) *Molorchus* は認めるが, *minor* をこの属の代表的な種とは認めない。

{ *Necydalis major*
Caenoptera または *Molorchus (Caenoptera) minor*

Molorchus umbellatarum

THOMSON, C.G. (1859, 1866)

PLAVILSTSHIKOV (1936, 1940²⁹⁾, 1948²⁹⁾)

(iii) *Molorchus* を認めず, *Necydalis* のシノニムとし, *Molorchus* の代りに別属を作る。

{ *Necydalis major*
Heliomanes minor, *H. umbellatarum*

NEWMAN (1840)

WHITE (1855)

{ *Necydalis major*
Caenoptera minor, *C. umbellatarum*

REITTER (1912)

PICARD (1924)³³⁾

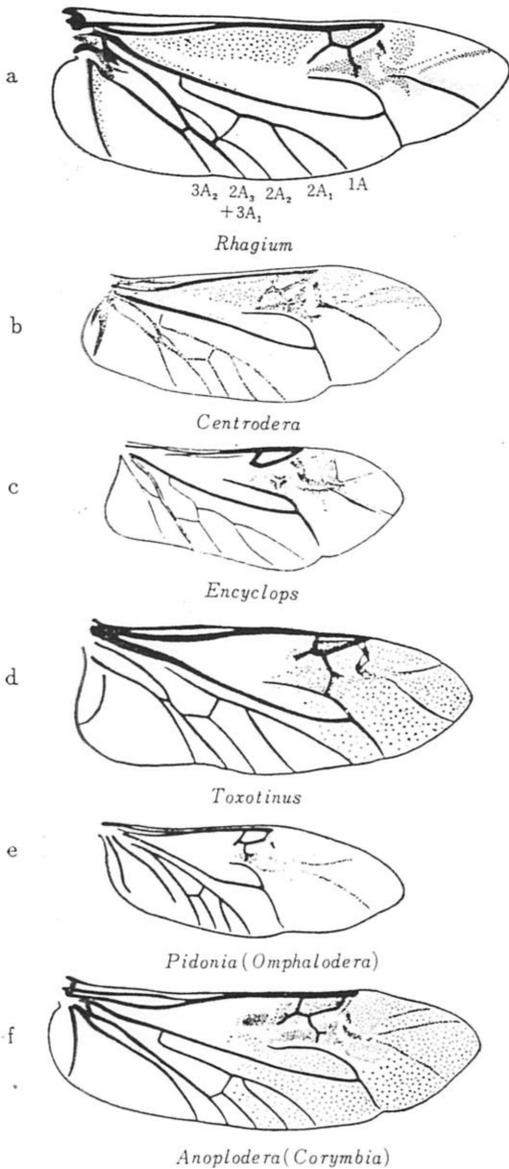
以上の4つの様式に大別できる。筆者の意見とその理由は後で述べるとして, 19~20世紀における別の問題について触れてみる。

第5表 J. THOMSON (1860) の *Necydalini*

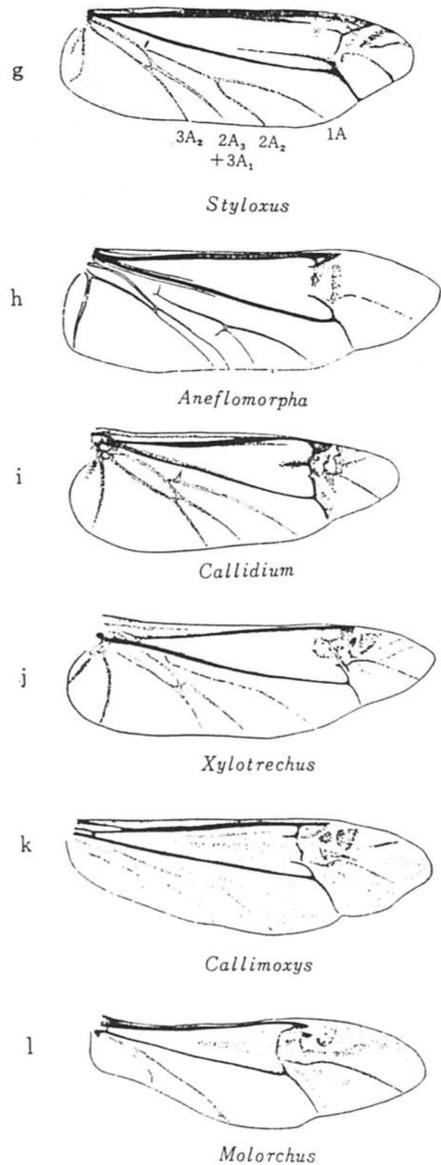
番号	属名	主な産地	現在の族
238	<i>Stenopterus</i> ILLIGER	欧州	Stenopterini ³⁾
239	<i>Callimus</i> MULSANT	欧州	Stenopterini ³⁾
240	<i>Stenorhopalus</i> BLANCHARD (<i>Platynocera</i> のシノニム)	南米	Necydalini
241	<i>Hephaestion</i> NEWMAN	南米	Necydalini
242	<i>Colobus</i> SERVILLE (nec ILLIGER) (ホノニム, <i>Nothopeus</i> PASCOE)	東洋区	Callichromini ^{b)}
243	<i>Rhathymoscelis</i> THOMSON	南米	Necydalini
244	<i>Ulochaetes</i> LECONTE	北米	Necydalini
245	<i>Necydalis</i> LINNÉ	北米	Necydalini
246	<i>Molorchus</i> FABRICIUS	北米	Molorchini
247	<i>Epania</i> PASCOE	北米, 東洋	Molorchini

a) AURIVILLIUS のカタログ (1912年) では Molorchini.

b) GRESSITT & RONDON の“ラオスのカミキリ” (1970年) p. 140, Fig. 24 c 参照



第2図 ハナカミキリ亜科の後翅翅脈^{10), 41)}



第3図 カミキリ亜科の後翅翅脈¹⁰⁾

7. *Necydalis*, *Molorchus* および

Stenopterus の Tribe について

これら3属は最初はすべて同じグループに属することを疑わずひとまとめにして、現在の *Necydalini* に相当する Tribe (族) に入れられていた。

例えば J. THOMSON (1860年) では、Lepturitae(現在のハナカミキリ亜科に相当)の第9 Division *Necydalitae* (族に相当)には10属が含まれているが、これらは現在では4族に分けられている(第5表)。

1864年 SCHJÖDTE³⁴⁾が初めて

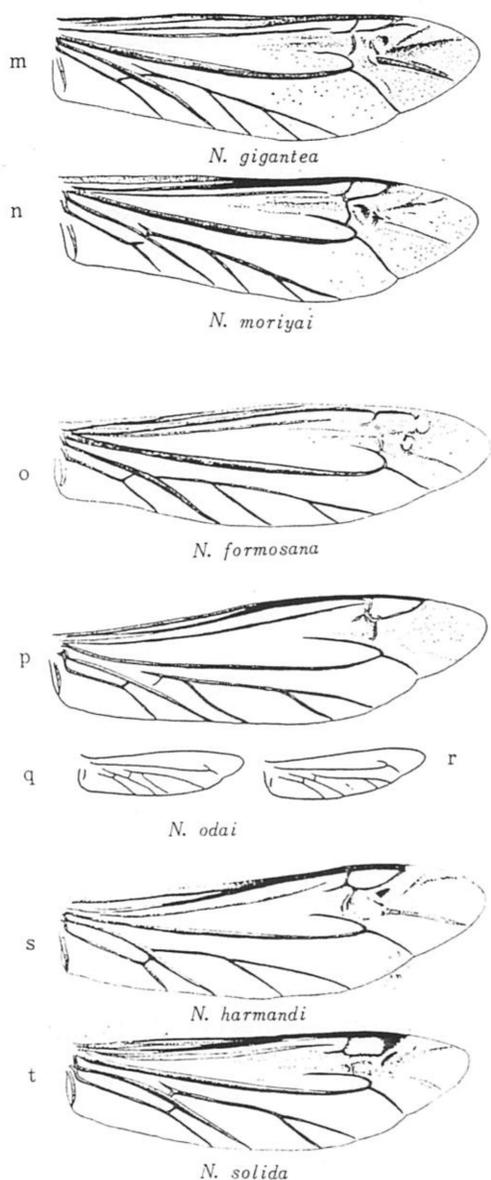
Necydalis→Lepterini (現在の亜科に相当)

Molorchus→Cerambycini (")

と異なったグループに入ることを明らかにした。そして *Stenopterus* については、*Callidini* に類似すると述べている。

次いで1866年、C.G. THOMSON が *Molorchus* FAB. と *Caenoptera* THOM. を *Cerambycidae* の *Molorchina* (族)に、*Necydalis* L. を *Lepturitae* の *Necydalina* (族)に属するという現在の形にした。

しかしその後も *Necydalis* をカミキリ亜科にする人



第4図 Necydalis の後翅翅脈³⁶⁾

も多く、例えば PICARD (1924年)³³⁾、松下真幸 (1933年)³⁵⁾、水戸野武夫氏 (1940年)³⁶⁾がある。

ハナカミキリ亜科とカミキリ亜科の区別点は次のごとくである。

中胸背板の発音部は中央の線で左右に分けられる。後翅翅脈は $2A_1$ と $2A_2$ が存在し、 $1A$ が $2A_{1+2}$ と接続している……………ハナカミキリ亜科 (第2図)

中胸背板の発音部は大きく、2つに分れず一体にな

る。後翅翅脈は $2A_1$ または $2A_2$ を欠くか、あるいはその両者とも欠く……………カミキリ亜科 (第3図)

ではいったい *Necydalis* はどうかと言うと、発音部は一体で左右に2分されていない。これは明らかにカミキリ亜科型。

後翅翅脈は郷遠氏の最近の発表³⁶⁾を引用させて戴くと、*Necydalis*(*Necydalis*) の *gigantea* と *moriyai*、*N. (Eonecydalis) formosana* は $2A_1$ と $2A_2$ がありハナカミキリ亜科型 (第4図 m, n, o)。*Necydalis* (*Necydalisca*) の *harmandi* と *solida* は $2A_2$ を欠き (第4図 s, t)、カミキリ亜科型。*N. odai* に至っては個体により $2A_1$ と $2A_2$ のあるもの (第4図 p)、 $2A_1$ を欠くもの (第4図 q)、 $2A_2$ を欠くものがある (第4図 r)。(後翅翅脈の記号は FORBES³⁷⁾ のを使用)。

$2A_1$ と $2A_2$ の存在する場合でも、真のハナカミキリ亜科の属の後翅では $2A_2$ が Y 字状に $1A$ と $3A_1$ の両者に接続しており、かなり違った印象を受ける。そのため $2A_1$ と $2A_2$ があるからハナカミキリ亜科と考えるよりは、

Necydalis (*Necydalis*) → *N. odai* → *N. (Necydalisca)* → $2A_1$ を欠くカミキリ亜科 → $2A_1$ と $2A_2$ のないカミキリ亜科 → *Callimoxys* 型 → *Molorchus* 型と、一連の翅脈の消失を考え、後翅翅脈に関してはもっとも原始的なカミキリ亜科と考えた方が道筋が立つように思う。

以上述べたように、*Necydalis* は現在の分類法に従えば、カミキリ亜科に入れる方がハナカミキリ亜科に含めるよりは妥当であると言うことができるが、両亜科のいずれに入れてもしっかりいれない。これと同じような例は *Philus* など4属を含む *Philini* で、ノコギリカミキリ亜科に入れる人と、ハナカミキリ亜科の族にする人があり、結論が出なかったが、CROWSON (1955年)³⁸⁾ は *Philinae* と独立させてしまい、GRESSITT and RONDON (1970年)³⁹⁾もこれを示持している。

これにならない、*Necydalinae* を提案するのは、*Necydalis* 以外の *Necydalini* の属の後翅がほとんど調べられていない今日、あまりにも早計であるが、1つの可能性として考慮しても良いであろう。

文 献

- 16) WHITE, A.: Catalogue of Coleopterous Insects in the Collection of the British Museum. London, p. 179, 181, 185 (1855)
- 17) THOMSON, C.G.: Skandinaviens Coleoptera

- 1, p. 150 (1859); *ibid.* 8, p. 44 (1866)
- 18) THOMSON, J.: Essai d'une Classification de la Famille des Cérambycides, p. 162 (1860)
- 19) THOMSON, J.: Systema cerambycidarum, p. 411 (1864)
- 20) MULSANT, E.: Histoire naturelle des coléoptères de France, Longicornes, ed. 2, p. 223 (1862)
- 21) FAIRMAIRE, L.: Genera des Coléoptères d'Europe, 4(2), p. 153, 179 (1864)
- 22) CURTIS, J.: British Entomology, 2nd. ed. 1, No. 11 (1834)
- 23) WESTWOOD, J. O.: Introduction to the Modern Classification of Insects, 2, p. 40 (1840)
- 24) PASCOE, F. P.: "Characters of some new Genera of the Coleopterous Family Cerambycidae", Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 3, 19, p. 311, note
- 25) LACORDAIRE, M. T.: Genera des coléoptères, 8, p. 477, 486 (1869)
- 26) GANGLBAUER, L.: Bestimmungs-Tabellen der europäischen Coleopteren, 7. Cerambycidae, p. 695, 720 (1882)
- 27) REITTER, E.: Fauna Germanica, IV, p. 24, 26 (1912)
- 28) AURIVILLIUS, C.: Coleopterorum Catalogus, 39. Cerambycidae: Cerambycinae, p. 259, 266 (1912)
- 29) PLAVILSTSHIKOV, N. N.: Fauna URSS, Cerambycidae 21, p. 461, 588 (1936); 22, p. 155, 652 (1940)
- 30) 水戸野武夫: 日本産鞘翅目分類目録, 94, 天牛科 p. 56, 61 (1940)
- 31) GRESSITT, J. L.: "Longicorn Beetles of China" Longicornia, 2, p. 123, 169 (1951)
- 32) PLAVILSTSHIKOV, N. N.: Определитель Жуков-Дровосеков Армении (Арменияの天牛の同定), p. 58 (1948)
- 33) PICARD, L.-M.: "Histoire Naturelle des Longicornes de France", Encyclopédie Entomologique 2, p. 120, 123 (1924)
- 34) SCHJÖDTE: "On the Classification of Cerambyces", Naturhist. Tidsskr. ser. 3, 2, p. 530, 554 (1864)
- 35) MATSUSHITA, M.: "Beitrag zur Kenntnis des Cerambyciden des japanischen Reichs", J. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ., 34 (2), p. 222 (1933)
- 36) 郷 遺: "ヒゲジロホソコバネカミキリの観察", 昆虫と自然, 6 (4), p. 11 (1971)
- 37) FORBES, W. T. M.: "The Wing-Venation of the Coleoptera", Ann. Ent. Soc. America, 15 p. 328~352 7 pls. (1922)
- 38) CROWSON, R. A.: The Natural Classification of the Families of Coleoptera, Nathaniel Lloyd and Co., Ltd., London (1955)
- 39) GRESSITT, J. L. & RONDON, J. A.: "Cerambycides of Laos", Pacific Insects Monograph, 24, p. 24 (1970)
- 40) LINSLEY, E. G.: "The Cerambycidae of North America", Part 1, p. 66, Fig. 13, 14 (1961)
- 41) 玉貫光一: 日本動物分類 10 (14), 天牛科 1, p. 36, Fig. 6, 7 (1939)

Necydalis 属の研究史 (1) の訂正と追加

第1表 (Vol. 1, No. 1, p. 2, 番号 11, *brevicornis*)

カミキリモドキ科? (誤) → ツツシクイ科 (正)

註. FABRICIUS (1801) は Systema Eleutheratorum 1 (p. 87) で, *Lymexylon* 属に移したが, この属は *Lymexylonidae* (ツツシクイ科) の基本属である。その後 SCHENKLING (1915) は JUNK の Coleopterorum Catalogus, Par 64 (p. 3) で *Atractocerus* PALIS 属に入れている。

第3表 (*ibid.*, p. 3, 下より2行目)

MULRANT (誤) → MULSANT (正)

ハチジョウウスアヤカミキリの 幼生期の形態について†

郷 遠†

(東京都新宿区南山伏町5)

この属のカミキリは、後ばねが退化*^{1),2)}しているカミキリのグループとしてコブヤハズカミキリ *Mesochthistatus binodosus* (WATERHOUSE) 等と同様に、各地区により、特定の分化をしてきたカミキリとして、その分布は動物地理学的に興味をもたれている種である。ハチジョウウスアヤカミキリ *Bumetopia heiana* HAYASHI は伊豆諸島に分布し、最近では房総半島^{3),4)}、伊豆半島^{1),5)}でも採集されているが、これら本州での採集例は、海流の関係で host が漂流したものでないかということ等を考慮に入ると、もう少し長い目で見ないと土着あるいは原産しているとは言えないと思われるので、数多くの地点での採集例の報告があることが望ましい。本文の目的もそこにあるので、新しく蛹の形態をのべると同時に、野外における近似種との区別も併記した。

B. heiana については竹類^{6),5)}、メダケ^{7),5)}、オノバヤンチャブシ^{7),5)}、等の採集例が報告され、また材中の幼虫、あるいは成虫の採集例として、竹類⁶⁾、ホウライ竹²⁾、メダケの生竹⁵⁾、メダケ^{7),5)}、等がある。

本文に用いた検体はいずれも下村徹氏によるもので、また、host の同定には島地謙博士をわずらわしたので、併せて御礼申し上げる。

幼虫の形態

本種の幼虫の形態については、すでに中村慎吾・小島圭三(1971)⁸⁾により報告されているので、ここでは幼虫の全体図 (Fig. 2) を示すだけにとどめ、その他は省略し、追加すべき2点のみ記す。

(1) 原著の記載に使用された検体は、下しんひげの第2節が折損しているために不明とされている。筆者の観察した検体では、下しんひげ第2節は第1節と同じく淡かった色で、太さは第1節：第2節=2：1、長さはほぼ等しいか、第2節の方がわずかに短かった (Fig. 3)。

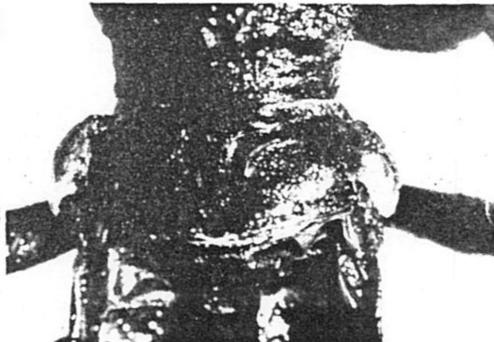
(2) 本種の幼虫は腹面より見て、肛門の後方第9腹節上に、微細な尾刺 Urogomphi が1本あるとされているが、筆者の観察した3例においては、2本幅狭く並んでいるものが2例、1本のものが1例であった。1本のもの

† Tooshi GOH: Morphological notes on the immature stages of *Bumetopia heiana* HAYASHI

* この属の後ばねは、コブヤハズカミキリの塊状の後ばねと比べて異なり (Fig. 1)、小さいながら明らかに羽化時の伸展と、痕跡的な翅脈も見られる。後ばねの退化現象は、後ばね自体の縮小という他に、羽化脱皮の際のはねの伸展機能の喪失という因子も考えられる。



Bumetopia heiana HAYASHI



Mesochthistatus binodosus (WATERHOUSE)

Fig. 1 退化した後翅 (Atrophic hind wings of the adult)



Fig. 3 ハチジョウウスアヤカミキリ幼虫の下しん
(Labium of larva of *Bumetopia heiana*)

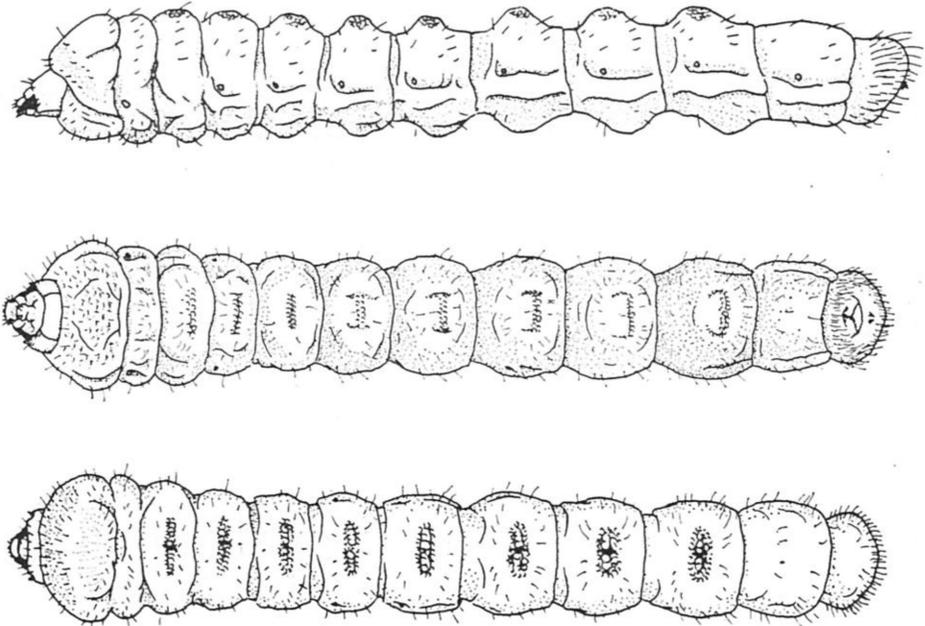


Fig. 2 ハチジョウウスアヤカミキリの幼虫
(Larva of *Bumetopia heiana*)

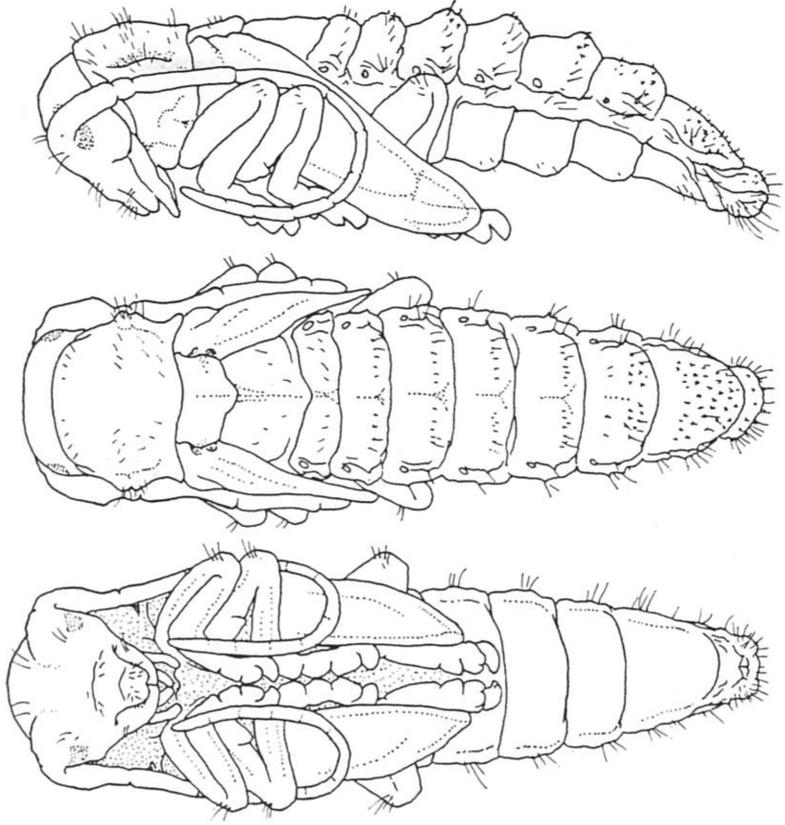


Fig. 4 ハチジョウウスアヤカミキリの蛹
(Pupa of *Bumetopia heiana*)

のは尾刺の部位が正中部より外れていることより、2本あるものが原形で、1本のは片方が退化したものであるかと思われ、多数例の中には、尾刺をまったく欠く個体も出てくる可能性がある。

以上に使用した検体は、下村徹氏により1972年2月16日、伊豆三宅島のアズマネザサの類 *Pleioblastus* sp. の自生立枯れより採集した3個体を使用した。なお、同氏によると、三宅島の本種は、成虫はススキの根元に多く発見され、幼虫もその中に認められるとのことである。

蛹の形態

全体的にずんぐりした円筒形で淡黄色。頭頂は円く毛がなく、触角第1節は太い。触角基部後方および間にかけて左右おのおの2~4本の毛がある。顔面平坦で幅広く逆三角形。触角基部間の幅は広い。眼の内側に2~3本の毛があり、大腿上に2本、上唇上左右におのおの5~7本の毛がある。上唇、頭楯部の境は溝状に凹み、頭楯上部には左右2~3本づつ毛がある。上唇の先端は二山状となり、小あごひげには毛を認めない。前胸背は平坦で前縁および中程におのおの毛が疎に横列し、中程のものは比較的多く、ともに正中部は無毛。また中程より後縁近くにかけてV字状に近く不明瞭に毛が疎生する。前胸背側縁は中程で二山状に突出し胸側突起となり、その基部はふちどられるごとく凹み、おのおの10本前後の毛が密生する。中胸小たて板、後胸小たて板は毛がほとんどなく痕跡的。小たて板溝はやや明か。

触角は合では体側に沿い下行し、後肢腿節の前方で彎曲内転し、さやばねの先端よりほぼ1/2の部を横切って、中・前肢跗節の外側に沿い上行し、小あごひげのつけ根外側で止る。早では、やや上部で彎曲内転し、さやばねの先端よりほぼ1/2の部を横切り、中・前肢跗節の外側に沿い上行し、前肢脛節端、小あごひげの先端両外側附近で止る。

触角第3節は体側に沿い彎曲する。

各跗節は太く、各腿節先端近く外側に微毛が5~6本横列する。

さやばね端は第4腹節中程に、後肢端は第4腹節後縁にはほぼ位置する。

各腹節は肋膜明か、背面の第1腹節上には微細毛が左右5~6本づつ分布し、刺状突起はほとんど見られない。第2~5腹節には後部に刺状突起を横列し、第5腹節にはさらにその上方にも2~4本の微細な刺状突起のある個体もある。これらの刺状突起は、外側に近いものに長毛を伴う傾向がある。第6腹節中央部後縁は後方にやや突出し、刺状突起は不規則となり、第7腹節では上縁部を除き全体的に分布し、尾端部は周囲に刺状突

起と長毛を分布する。

各腹節腹面はほとんど毛や刺状突起を認めず、尾端節は肛門の側方から上方にかけて隆起し、多くの微毛がある。

以上に使用した検体は、前述の幼虫3個体のうち、2個体を飼育し、1972年8月13日蛹化、同年8月29日に羽化した♀と、1972年9月7日蛹化、9月12日固定した♂を基にした。

♂=体長15.8mm, 前胸幅3.6mm, 最大体幅3.7mm

♀=体長16.5mm, 前胸幅3.6mm, 最大体幅4.3mm

ハチジョウウスアヤカミキリと

ハイロヤハズカミキリの幼虫、蛹の区別点

竹類を host とするカミキリは、この他にタケトラカミキリ、ベニカミキリ、ハイロヤハズカミキリ、サビアヤカミキリ等が判っているが、その食性や、host の太さ等より考えると、野外で一番鑑別を必要とするのはハイロヤハズカミキリである。キボシチビカミキリ *Sybra flavomaculata* BREUNING の幼虫等も、本種の幼虫と一見して似ているが、host が全然ちがう(モミ)のと、やや小さく、尾刺がないことなどで区別できる。

ハチジョウウスアヤカミキリ、ハイロヤハズカミキリは、ともに細い(径7~8mm前後)竹類の中空部にいて、その内壁を食し、中空部の前後を食糞で充填して、生態もよく似ている。以下のべるこの二者の区別点は、野外で肉眼〜ルーペで判る程度のものである。

表のように、はっきり区別できるし、大きさもハイロヤハズカミキリの方が大きいから、逆をいえば、野外でウスアヤカミキリの類の幼虫を採りたい時は、やや細目の竹をねらった方が効率的のように考えられるが、皮肉なことに、竹の種類によっては材部が厚く、したがって中空部の内径は外観だけでは予測できない。

表 ハチジョウウスアヤカミキリとハイロヤハズカミキリの幼虫、蛹の区別点

	区別点	ハチジョウウスアヤカミキリ	ハイロヤハズカミキリ
幼虫	前胸背	前胸背前縁の毛は長く疎	前縁の毛は短く密生する
	下口節	白色	褐色
蛹	背面尾端節	細毛多く分布(尾刺は小さい)	太く短かい褐色の針状刺毛が密生
	上唇	先端二山状で毛は少なく不規則	先端は丸く、ほぼ二列状に毛が横列
蛹	さやばね端	ほぼ丸い	するどく針状に突出する
	尾端	肛門上方および側方は毛で囲まれる	毛は全然なくトゲ状突起で囲まれる

○印は特に判りやすい点

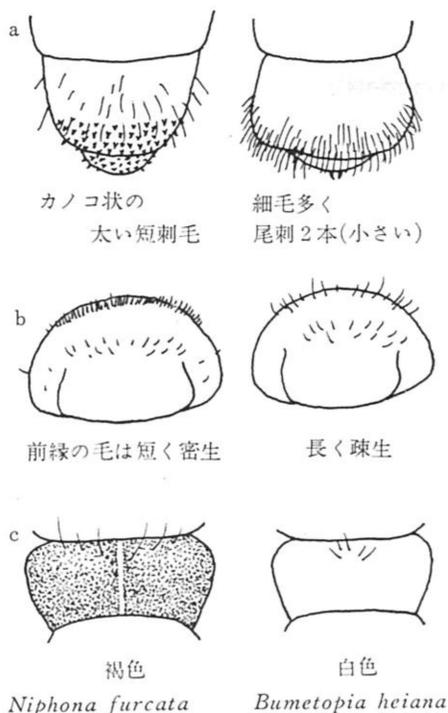


Fig. 5 2種の幼虫の区別点 (Difference of larva)

a. 末端節背面の毛 (dorsal view) b. 前胸背の毛 (hair of pronotum) c. 下口節の色 (coloration of hypostoma)

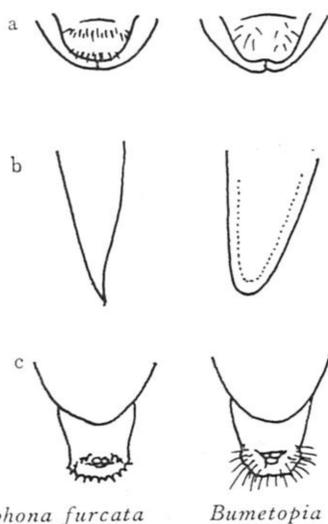


Fig. 6 2種の蛹の区別点 (Difference of pupa)

a. 上しんの毛 (hair of labrum) b. さやばねの先端 (elytral apex) c. 尾端部の毛 (hair of abdominal apex)

Summary

In this paper, it is described as to the larva and pupa of *Bumetopia heiana* HAYASHI, and also host plant (*Pleioblastus* sp.).

At immature stages, *B. heiana* resembles *Niphona furcata* BATES in form and food habits.

But *B. heiana* can be distinguished from *N. furcata* by "coloration of hypostoma, hair and urogomphi of abdominal apex, hair of pronotum," at larva, and "hair and form of labrum, form of elytral apex, hair of abdominal apex," at pupa.

引用文献

- 1) 林 匡夫 (1966): 日本のかみきりむし (8), 昆虫学評論 18 (2)
- 2) 小島圭三・林 匡夫 (1969): 原色日本昆虫生態図鑑 (1) カミキリ編
- 3) 石田正明 (1971): ハチジョウウスアヤカミキリが千葉県で採れていた, 月刊むし No. 18
- 4) 小田義広・久保田篤男 (1974): 伊豆半島でハチジョウウスアヤカミキリを採集, ELYTRA 2 (1)
- 5) 中村慎吾・小島圭三 (1971): ハチジョウウスアヤカミキリ幼虫の形態, 比和科学博物館研究報告 No. 15
- 6) 田中康彦 (1967): 八丈島のカミキリ, INSECT MAGAZINE No. 70
- 7) 小宮次郎・酒井 香・高桑正敏・宮原道則 (1972): 伊豆諸島のカミキリ, 月刊むし No. 18
- 8) 京浜昆虫同好会編 (1973): 新しい昆虫採集案内Ⅲ, 内田老鶴圃新社

(本文の学名は(2)によった。)

稿 KŌCHŪ 虫

ヤエヤマクビナガハンミョウ与那国島の記録

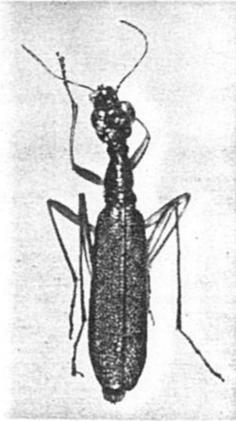
杉野 広一

ヤエヤマクビナガハンミョウ *Collyris loochooensis* KANO は従来、八重山諸島の石垣・西表両島に産することが知られていたが、筆者は与那国島での採集標本を持っているので報告しておく。

1 ex., 与那国島宇良部岳, 9. Ⅶ. 1973, 正木清採集

標本を恵与された正木清氏, 標本写真を写して頂いた石原俊雄氏に深謝する。

(〒663 西宮市上大市4-148)



伊豆神津島のクワガタ 2 種

藤田 宏

伊豆諸島のほぼ中央に位置する神津島からは、ノコギリ・コ・ミクラミヤマ・ネプト・チビの 5 種のクワガタが記録されている。

筆者は1973年、同島にて調査をされた高桑正敏氏の採集品より未記録と思われる下記 2 種を頂いたのでここに報告する。

1. ミヤマクワガタ

Lucanus maculifemoratus MOTSCHULSKY

1 合, 神津島返浜分岐点付近, 16. Ⅶ. 1973,

高桑正敏採集

ヤマグワの枯枝に止まっていたもの。

本種の伊豆諸島における記録は今までになく、今回の採集は大変興味深いことと思われる。写真から判るように、形態上も大肥の彎曲など従来のミヤマクワガタとは異なっており、将来別亜種になる可能性もあるという。

小型個体であり、かつ 1 合のみの採集なので、現時点ではこれ以上の考察は差し控えたい。

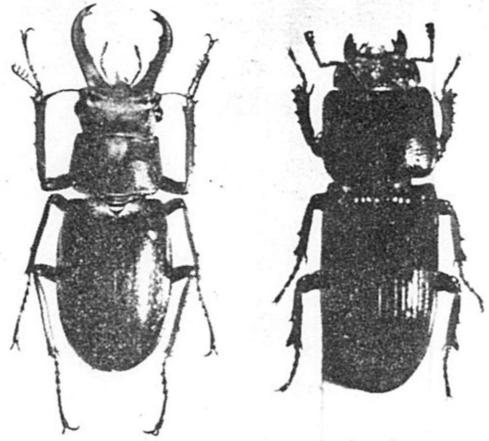
2. マメクワガタ *Figulus punctatus* WATERHOUSE

1 ex., 神津島返浜分岐点付近, 16. Ⅶ. 1973,

高桑正敏採集

タブと思われる太い伐採木上にて。

本種は1972年、御蔵島で発見され、伊豆諸島にも分布



左: ミヤマクワガタ 右: マメクワガタ

することが知られるようになったが、1973年神津島にも採集された。

末筆ながら、貴重な標本を快く恵与下さった高桑正敏氏, 日頃より伊豆諸島のクワガタについて色々とお知らせ頂いている市川敏之氏に感謝したい。

(〒110 台東区台東2-29-6)

ジュウシチホシハナムグリの

奥多摩における記録

藤田 宏

ジュウシチホシハナムグリの *Paratrichius septemdecimguttatus* SNELLEN VOLLENHOVEN は比較的南方系のハナムグリで、分布は本州・四国・九州・屋久島とされている。

本州においては、主に紀伊半島以南にて得られており、それ以北では関東山地に沿って断片的にわずかな記録があるにすぎなかったが、最近、東京都下奥多摩でも本種が得られているこ

とは、一部の同好者により知られている。

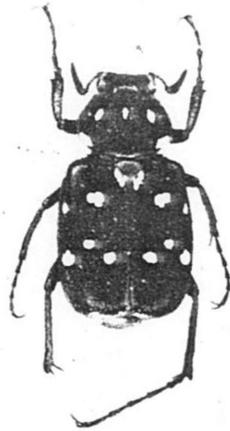
同地における記録はまだ発表されていないと思われるので、筆者の手元にある記録を報告しておきたい。

1 合, 奥多摩御岳山, 27. Ⅶ. 1971, 下村徹採集

1 合, 奥多摩六石山, 7. Ⅶ. 1973, 深町宗通採集

1 合, 奥多摩六石山, 14. Ⅶ. 1973, 桑久仁雄採集

以上の 3 個体は、すべて黒地に乳白色の一定の紋をも



つものであった。

貴重な標本を恵与下さった各氏に深謝したい。

(〒110 台東区台東2-29-6)

徳島県剣山でアオナガタマムシを採集

小笠原 隆



1973年7月、徳島県剣山でカミキリムシを採集中に、アオナガタマムシ *Agrilus marcopoli ulmi* Y. KUROSAWA を得たので報告する。

本種は北海道・本州・九州の山地より採集されているが、東京都下奥多摩日原・山梨県小金沢以外の地ではかなり稀な種で、四国における記録は今回が初めてと思われる。

1 ex., 徳島県剣山, 30. VII. 1973,

小笠原隆採集, 藤田宏保管

採集地点は、リフト終点西島駅から尾根道を少し登った標高1750m付近で、樹種不明の枯枝より得られた。

(〒780 高知市西秦泉寺420-19)

紀伊半島で採集された注目すべきタマムシ2種

秋山 黄洋

1. シリグロナカボソタマムシ

Coraeus kiangsuanus nigromaculatus

Y. KUROSAWA

日本産ナカボソタマムシ属の最大の種であるが、現在まで採集された頭数は黒沢良彦博士によれば、タイプ標本を含めてわずか2♂2♀である*)。筆者は幸いにも5頭めである奈良県伯母子岳産の標本を見ることができたので報告しておきたい。

1 ♀, 奈良県伯母子岳, 19. VII. 1971, 松田潔採集

ミズナラのピーティングで得たという。本種の原産地は、伯母子岳の続きの護摩ノ壇山で、この付近一帯は深い原生林におおわれ、採集者もほとんど訪れていないようで、今後の調査が楽しみである。

*) 1 ♂, 和歌山県護摩ノ壇山 (holotype); 1 ♂, 新潟県黒川村; 1 ♀, 山梨県 東山梨郡三富村 西沢 (以上, 甲虫ニュース No.10, 1970); 1 ♀, 札幌市円山 (未発表)

2. アカヘリミドリタマムシ

Buprestis (Cypriacis) niponica HOSCHECK

日本産タマムシの中でもっとも美しい種であろうが、福島県湯ノ花温泉を除けば、数ヶ所で各1~2頭が採集されているにすぎない。

1 ♀, 奈良県荒神山, 25. VII. 1972, 松田潔採集

関西地方では原産地の京都に次ぐ記録であろう。採集者の松田氏によれば、峠の茶屋付近において2m位の高さにあったマツの枯枝についていたという。

なお、現在まで採集されたアカヘリミドリタマムシはすべて♀で、♂はまだ採集されたことを聞かない。この種に限らずタマムシ一般に♂が少ないようである。

末筆ながら、快く発表を許された松田潔氏に深く感謝したい。なお、標本は筆者が保管している。

(〒235-02 横浜市磯子区坂下町1-43)

神奈川県城ヶ島の

ルイスナカボソタマムシの記録

藤田 宏

ルイスナカボソタマムシ *Coraeus rusticanus* LEWIS は北海道・本州・四国・九州および伊豆諸島に産する比較的少ない *Coraeus* である。

本種は伊豆諸島においては海岸付近にでも得られるものであるが、それ以外では中山帯に産し、低山帯および平地からの採集例を聞かない。

筆者はここに、まったくの平地であり、かつ海岸であるところの神奈川県三浦市城ヶ島産の標本を所持しているので、大変興味深く思い、報告しておく。

1 ex., 東京羽化脱出, 31. V. 1972, オオバヤシヤブシ村 (三浦市城ヶ島, 25. IV. 1972, 下村徹採集)

末筆ながら、貴重な標本を快く恵与下さった下村徹氏に深謝したい。

(〒110 台東区台東2-29-6)

青森県におけるオオルリハムシの冬期採集例

木附 嘉理

オオルリハムシ *Chrysolina virgata* MOTSCHULSKY f. *obsurofasiata* JACOBY の冬期における採集例があるので報告する。本種は美しいことや日本産ハムシの中では比較的大型であり、また産地により色彩を異にすることで有名であるが、生息環境が水辺であることや比較的少ない種に属することなどから、越冬報告はなかったもようである。

今回採集された個体は、私の手によるものではないため詳しい採集状況はわかりかねるが、水辺の畔のようところでオサ掘りの際に出てきたもので、かなり個体が新鮮なことから、おそらく夏の終わりから秋期にかけて発生したものではないだろうか。

1 ex., 青森県十三湖, 7~12. XI. 1973, 坪井採集

なお、本種は日本海側では山形・新潟・佐渡に採集例があるが、青森県では初めての記録と思われる。

末筆ながら、上記標本を恵与された坪井氏、ならびに発表にあたりいろいろと御指導いただいた平野幸彦氏に感謝申し上げる。

(〒182 調布市柴崎2-18-1)

長野県軽井沢における

オオシラホシハナノミの記録

平山 洋人

ハナノミ科オオシラホシハナノミ *Hoshihananomia pirika* KONO は、本州からは現在までに群馬県片品村大沢、兵庫県氷ノ山から記録され、原産地北海道の他に四国・九州でも採集されている(未発表)らしいが、いずれの地においても稀なものようである。

1973年、筆者は軽井沢において本種を採集しているので報告しておく。

1♀、長野県北佐久郡軽井沢町矢ヶ崎山, 8.VI.1973

ワレモコウ、アザミ類の多い草原を飛翔中のもの。

末筆ながら、本種の同定および御教示下さった高桑正敏氏に深く感謝したい。

(〒336 浦和市大字文蔵11-48)

山梨県のおオキボシハナノミの記録

高桑 正敏

ハナノミ科おオキボシハナノミ *Hoshihananomia auromaculata nipponica* NOMURA は南方系の種と考えられ、原亜種は台湾に産する。本亜種は屋久島・対馬・四国・本州から記録され、また意外にも北海道トムラウシにおける単発記録がある。本州では奈良県春日山に稀ではないらしいが、その他の地域ではこれまで採集された話を聞いていない。しかし、1972年に山梨県大菩薩山塊で2頭が採集され、ようやく北海道と奈良県との分布空白が一部だが埋まったので、ここに報告



しておきたい。

しておきたい。

2♀♀、山梨県大月市小金沢林道(標高約1300m), 30.VI.1972, 木村欣二・露木繁雄採集, 標本筆者保管

なお、上記山梨県産は他産地のものと比較してとくに差は見いだせず、わずかに1♀の上翅黄色紋がやや淡色であるにすぎない。

(〒236 横浜市金沢区六浦町3577)

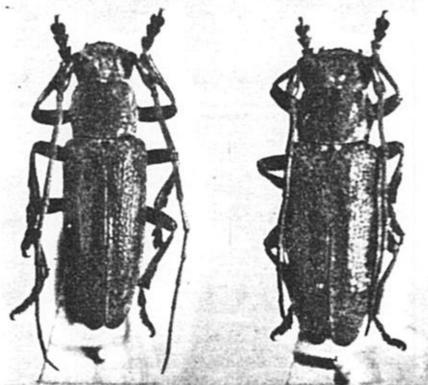
伊豆半島でハチジョウウスアヤカミキリを採集

小田 義広*・久保田篤男**

ハチジョウウスアヤカミキリ *Bumetopia japonica heiana* HAYASHI は従来、伊豆諸島から知られていたが、1972年に石田正明氏によって千葉県勝浦の採集例が報告され(月刊むし18号, 16頁), 本州にも分布することが明らかとなった。

筆者2人は静岡県伊豆半島下田付近を訪れた際に、メダケ材中より成虫を得ることができたので、千葉県下に続く本州の記録としてここに報告しておきたい。

12exs., 伊豆半島下田～須崎, 11.II.1973



左:♂ 右:♀

* (〒253-01 神奈川県高座郡寒川町倉見)

** (〒346 久喜市六万91 埼玉県園芸試験場)

長野県戸台でヨコグロケシカミキリ

大沢 昭夫

1973年5月4, 5日に長野県上伊那郡戸台を訪れた際に同所の枯木を採集してきたところ、ヨコグロケシカミキリ *Exocentrus fisheri* GRESSITT が1頭脱出したので報告する。

1♂, 横浜羽化脱出, 21.V.1973, 材種不明(長野県上伊那郡戸台, 4.V.1973, 筆者採集)

本種は草間慶一(1973, 日本産カミキリの生態と分布一覧表, 新しい昆虫採集案内Ⅲ)によれば、札幌・南大雪・福島県湯ノ花・奥日光・武尊山から得られ、長野県

下からはまだ報告はないものと思われる。

(〒230 横浜市鶴見区潮田町3-138-1)

長野県扉温泉でムネモンヤツボシカミキリ

林 良一

1972年3月19日に長野県松本市外の扉温泉から持ち帰ったサルナン材を、帰宅後の同年4月2日に割ってみたところ、ムネモンヤツボシカミキリ *Saperda tetrastigma* BATES 1♂ (成虫) が出てきた。

扉温泉の早川広文氏によれば、同地での採集例を聞かないということなのでここに報告しておく。

なお、同じサルナン材からは後日に多数のアカネカミキリ *Phymatodes maaki* (KRAATZ) が脱出した。

(〒154 世田谷区上馬5-38-3)

ムネモンウスアオカミキリ石垣島の記録

杉野 広一



台湾原産のムネモンウスアオカミキリ *Pareutetrappa magnifica* (SCHWARZER) は、わが国からは八重山諸島西表島での3例の報告^{1),2)}があるが、筆者は石垣島から採集できたので報告しておく。

1♂, 石垣島オモト岳, 11. IV. 1973, 杉野広一採集

なお、この個体は頭部と前胸の青い f. *unicolor* である。

1) 小島・林・国吉・渡辺: 高知大学学術研究報告

14, 自然科学Ⅱ No. 9, p. 99, 1965

2) YOKOYAMA, H.: Ent. Rev. Japan 23(2), p. 100, 1971

(〒663 西宮市上大市4-148)

伊豆御蔵島のカミキリ2種

藤田 宏

1. ハネナンチビカミキリ

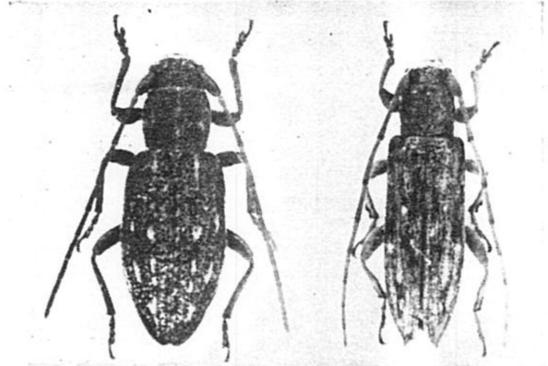
Palausybra hachijoensis HAYASHI

1♂, 御蔵島黒崎高尾, 30. VII. 1973, 藤田宏採集
伐採木のピーティングによる。

1♀, 御蔵島川田, 1. VII. 1973, 藤田宏採集

シイ倒木のまだ枯葉が付着している枯枝のピーティングによる。

本種は東南アジア(パラオ諸島)に同属種をただ1つもち、また形態的にも写真に示すように、一見アカガネカミキリにも似る?という特異な種である。



左: ハネナンチビカミキリ 右: アヤモンチビカミキリ

八丈島(原産地)と御蔵島より記録されているが、八丈島では原記載(1958年)以来採集された話は聞かず、また御蔵島においても数例のみで最近では得られていなかったものため、報告しておきたい。

2. アヤモンチビカミキリ *Sybra ordinata* BATES
1 ex., 御蔵島里, 1~8. VII. 1973, T. NOMURA・T. AKIYAMA 採集

種子島以南の島々には普通に産し、四国・九州にも分布するが、本州からは確実な記録を知らない。もちろん伊豆諸島からの記録も従来なかったもので(沢田・渡辺(1969)の記録はミクラチビカミキリ *Sybrodiboma mikurensis* HAYASHI のことである)、今回が伊豆諸島としては初めてと思われる。

(〒110 台東区台東2-29-6)

屋久島でオニホソコバネカミキリ♀を採集

川田 一之



筆者は、1973年7月に屋久島を訪れた際に、オニホソコバネカミキリ *Necdalis gigantea* KANO ♀を採集した。これまで♂は3頭得られているが、♀は初めてと思われるので報告する。

1♀, 屋久島白谷, 21. VII. 1973
土場を飛んでいる所を採集。

この個体は、群馬県大沢産のものと比較すると、触角がいくぶん長く、細い体をしている。

なお、この土場では数日の間に、本種のほかキスジトラ(subsp. *ka-makarii*)・ムモンチャイロホソバネ・トラフホソバネ・アラカワシロヘリトラ・ヤクシマミドリ等のカミ

キリが採集された。

(〒164 中野区東中野5-20-13)

関東周辺におけるトワダムモンメダカ

カミキリの採集記録 2例

齊藤 秀生*・川田 一之**

トワダムモンメダカカミキリ *Stenhomalus lighti* GRESSITT は北海道・本州・四国より分布が知られている種であるが、長野県松本周辺・東京都下高尾山・札幌市篠舞を除いてはその採集例は稀で、産地も限られている。

筆者らは関東周辺において、下記の通り本種を採集しているので報告したい。

1♂, 静岡県天城山, 13. V. 1973, 齊藤秀生採集
白色花上にて。同地では、3頭めの個体と思われる。

1♂ 2♀♀, 神奈川県丹沢物見峠, 14. V. 1973, 川田一之採集

キブシ枯枝中より採集。丹沢山塊では、おそらく初記録と思われる。

* (〒154 世田谷区弦巻4-2-17, くるみ荘30号)

** (〒164 中野区東中野5-20-13)

奥多摩川乗谷で

フタスジカタビロハナカミキリを採集

陶山 淳

フタスジカタビロハナカミキリ *Evodinus bifasciatus japonicus* MATSUSHITA の関東以北における採集例は少なく、東京都下奥多摩からは御岳山麓、三頭山、五日市などで数頭が得られているにすぎない。

筆者は本種を川乗谷にて採集しているので、ここに新産地として報告しておきたい。

1 ex., 奥多摩川乗谷, 28. IV. 1973, 陶山淳採集

午後3時頃、川乗沢の停留所の後にある岩壁に飛来したところを採集したものである。

なお、当日は晴天無風で、気温も高かった。

(〒160 新宿区若葉1-14, 吉野方)

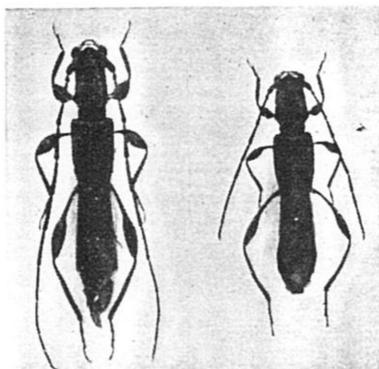
東京都下奥多摩で

ホソツヤヒゲナガコバネカミキリを採集

藤田 宏

ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ *Molorchus nitidus* OBIKA は、新潟県姫川谷・秩父・長野県伊那戸台・兵庫氷ノ山・英彦山・対馬?などで採集されている(草間慶一, 1973, 日本産カミキリの生態と分布一覧表, 新しい昆虫採集案内Ⅲ)。

筆者らは奥多摩で本種を採集したので報告する。



左:♂ 右:♀

1♂, 東京都西多摩郡奥多摩町小留浦(標高約400m), 26. IV. 1973, 筆者採集

1♂, 同上, 30. IV. 1973, 齊藤秀秋採集

4♂♂ 2♀♀, 東京都西多摩郡水根(標高540m), 30. IV. 1973, 筆者採集(写真)

5♂♂ 1♀, 東京都西多摩郡峰谷橋(標高540m), 3. V. 1973, 筆者採集

4♂♂ 1♀, 同上, 森慎一郎採集

なお、峰谷橋では他の *Molorchus* としてオダヒゲナガコバネカミキリとコジマヒゲナガコバネカミキリをそれぞれ1♀ずつ採集できた。

末筆ながら、同定・御教示頂いた小比賀 正敬氏、また、御助力下さった森慎一郎・森祐二郎・齊藤秀秋の各氏に深謝したい。

(〒110 台東区台東2-29-6)

高知県室戸岬における

キイロメダカカミキリの記録

深町 宗通



キイロメダカカミキリ *Stenhomalus nagoi* HAYASHI は、従来、九州(北部)・本州(春日山)の分布が知られているが、筆者は高知県室戸岬より持ち帰った枯枝(クスノキ科)より、本種を羽化させたので報告する。

7 exs., 東京羽化脱出, 6~13. VII. 1973, クスノキ科材(高知県室戸岬, 6. VI. 1973, 筆者採集)

なお、九州(立花山)、本州(春日山)の標本と比較してみたが、差異は見い出せなかったことを付記しておく。

(〒170 豊島区上池袋2-28-13, 新井方)

編集後記

○早いもので、今年ももう採集シーズンたけなわの頃。すでに奄美・沖縄方面では春性の甲虫採集の成果の声も聞こえてくる。とりわけ、八重山における日本未記録のエンマコガネの発見は、1974年甲虫界のすばらしい幕あけを飾ってくれた。

そういったなかで、ELYTRAの今年第1号をお届けする。やはりカミキリが主体となってしまうが、短編記録はかなり充実したものとなったのではなからうか。

○稿虫(KŌCHŪ)、短報欄のタイトルはこれに決った。いろいろな案をお寄せ下さった方々には編集局一同、心から御礼申し上げたい。

“虫ペン”というネームには、残念ながら及ばないかもしれない。しかし、内容はひけをとりたくないものだ。稿虫、すなわち、甲虫の原稿書きのムシ、のネームにふさわしく、分布・生態・形態などの短編記録をどしどし送って下さるよう、みなさんに強くお願いする。

○ELYTRA 処女号では、内容的にはっきりと3つのパターンを示してみた。つまり、原著論文、短編記録、随筆・ニュース記事一般、であり、それらは ELYTRA の将来に対する1つの試みであった。

さて、これらに対する評価。学会通の人からは、学会誌と銘打つ以上はもっと原著論文を主体とするよう編集せよ、と教えられた。一方、若い層の人からは、ユニークで大変に気に入ったから同じスタイルで続けるよう望む、とほめてくれた人までいる。そして、似顔絵の入るような文章は、別に第2会誌を作ってそれに掲載したらどうか、という大変に建設的な意見を下さった人もいた。

これらは、どれもこれももっともな意見であろうと思う。学会誌という性格をよく知っている方々は、ELYTRA 処女号が従来の学会誌とはずいぶん違った冒険的性格であったことに心配されたのだろう。また、若い人や情報がなかなか入らない人は、学会誌という従来の堅苦しいパターンを

抜けだした処女号がよかったのかもしれないし、あるいはニュース的性格のものがありがたかったのかもしれない。さらに、第2会誌の案は、いわば相対する性格を熟知したうえでのもっとも無難な行き方だろうと思う。

編集局としては、もちろん、皆さん全部が満足できるような会誌へと近づくことを考えている。それと同時に、ELYTRA を編集しがいのある独自の誌風へと、だいそれた望みも抱いている。そこで、現時点における編集局の考えだが、原著論文の投稿が多くなってその掲載に追われる時期がくるまでは、会誌は ELYTRA 1本にしまりたい。そして、もし可能であるならば、原著論文と随筆一般とが同一誌内においておかしくないようなものをめざしてみたいと思う。いかがだろうか？

いずれにせよ、ELYTRA は原著論文が主体とならねばならない。うぶ声をあげたばかりの会誌では不安かもしれないが、積極的に原著論文を送って下さるよう、諸先生がた、諸先輩がたに、再びお願いする。

○第2巻第2号は何となくして10月中には発行したもの。投稿メ切りは8月20日頃。たとえ古い採集例であっても記録にとどめておくべきものは、原稿をお寄せ下さい。記録することもまた、同好者のマナーでありたいもの、などと勝手なことを言って第2巻第1号を終えよう。

(高桑正敏 記)

ELYTRA Vol. 2, No. 1

昭和49年5月25日 印刷

昭和49年5月30日 発行

編集者 露木繁雄

高桑正敏

発行者 草間慶一

発行所 日本鞘翅目学会

Japanese Society
of Coleopterology

東京都台東区東上野4-26-8

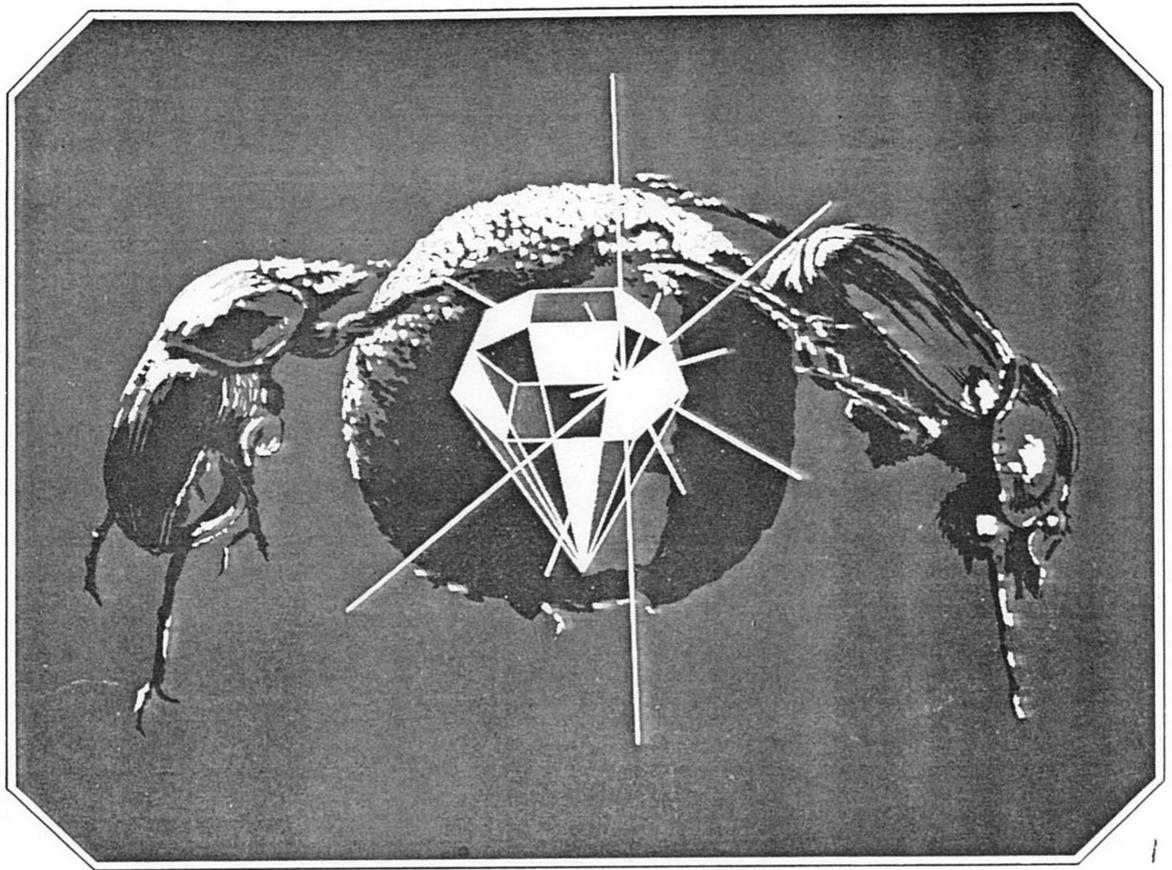
福田惣一方(〒110)

c/o, FUKUDA, 4-26-8,

Higashi-Ueno, Taitō-ku,

Tōkyō-city, Japan

印刷 樺大和印刷



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

*すばらしい特長

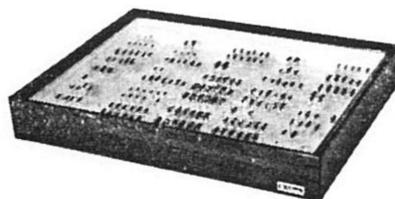
- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底

● 高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島二丁目二二番五号 ☎03(三八一)四五四七
郵便振替 東京一三三七九

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和49年4月現在のものです